

聖林寺  
十一面観音像  
国宝

この素晴らしい作品は、慈悲の菩薩である観音の像である。観音はしばしば仏教における慈悲の女神とされる。観音は人々を病気から守り、食べ物や富を確保する手助けをされると考えられている。11の顔は様々な表情をしているが、一番大きな顔は慈悲と静けさを醸し出している。11個の顔の意味には諸説あるが、悟りに至るまでの道筋の10の段階を表しており、11番目の一番上についている顔が悟りを開いた状態を示している、という解釈もそのひとつである。

8世紀につくられたこの像は、日本における最も精緻な仕上げの十一面観音像のひとつであり、その穏やかな表情、精巧な衣と持物は特筆すべきである。アメリカ人の美術史家アーネスト・フェノロサ（1853～1908年）などの研究者たちは、この像をギリシャの彫刻作品「ミロのヴィーナス」などの西洋美術の傑作と並び評している。

高さ209センチメートルのこの観音像は堂々たる存在感である。木心乾漆造りで、もともとは全身に金箔が貼られていたが、何世紀もの時間を経て、その一部は剥がれ落ちてしまっている。

日本政府が仏教寺院と神道の神社の分離を命じた（神仏分離令）ため、大神神社の近くにあった大御輪寺にあった十一面観音像が1868年に聖林寺に移された。